



平成15年度ODA民間モニターに参加して

平成15(2003)年10月12日～18日

飛行機の窓から見るハノイ市は蛇行した幾つもの川が流れてる。四角に区切った広々とした水田が広がっていた。ハノイ市の人々は、古来より治水が最大の課題であったであろうと想像させるものであった。

さらに飛行場からハノイ市内への移動するバスの中から見る眺めは、田や畑で働く人々、そこには牛を放牧している。よく働いているベトナムの人々が目に入った。

執筆者 神 田 進

10月12日(日)1日目

ハノイ市内



若者も年寄りも皆、バイクに乗って市内を走り回っている。皆笑顔で自由を満喫しているようだった。家族で子ども2人挟んで4人乗り。(違法だそうだが)若い男女がデートで。ベトナムは3家族、3世代同居だそう。若い夫婦は、一息つくためにバイクで出て行くとのことだ。

10月13日（月）2日目 トーイック河川改修とイエンソーポンプ場の視察

水環境改善計画（有償資金協力 貸与金額185.71億円）

この日は、トーイック河川改修とイエンソーポンプ場の2箇所の視察に行った。

「トーイック河川改修」は写真のように、護岸工事がなされ、川幅と川底を深くした。護岸の石積みは自然石を割って器用に重ねられ、石と石の間はセメントを詰め、丁寧な工事がされていた。やはり下水処理はなされておらず、ひどい匂いを放たれていた。現地スタッフの説明では、匂いはするけれども、以前に比べればたいへん匂わなくなってきたとのことであった。しかし、一般家庭からでる下水がこの川へ流れており、川の流れも緩やかで、水の流れている様子が目には見えなかった。一刻も早く下水処理場をつくり、浄化された水がこの川へ流れ込むようになれば良いと思われた。

市内には、まだ改修されていない小さな川がいくつもあり、多くのごみの山の中に川があり、汚泥の状態のままのものもあった。以前のトーイック川もこのような川だったのだろうと想像できた。

きれいに改修されたトーイック川



イエンソーポンプ場のポンプ



次にポンプ場の視察をした。ポンプは上に6台下に5台あり、フル稼働では毎秒45m³の排水能力があるとのことであった。当日は2基が稼働していた。それでもポンプ場に来る汚濁された水はゆっくりとポンプ場へと流れていた。ポンプ場の目的として次の4つの点を現地のスタッフは話された。

「一つ目は、2日間で172mm以上の降水量があれば、市内は水浸しになる。これを防ぐためのものである。二つ目は、市内の川の環境改善にもなる。三つ目は、下水処理会社の学習センターとしての機能を果たす。四つ目は、下水処理として。また、ハノイ水環境改善計画は、下水処理場のプロジェクトがあり、あと4年もかかる。」とのことであった。

また、「川の中に住む者、ごみを捨てる者が少なくなった。80%改善できたと思う。さらに、ほとんどの市民がごみを捨てない意識が芽生えた。日本下水処理プロジェクトという名で市民に親しまれている。このプロジェクトのお陰で洪水が少なくなったことと、川の環境が良くなったという。すぐに結果が表れ市民の評価はたいへん高い。」とのことであった。

ハノイ水環境改善計画

ハノイ水環境改善計画は、ハノイ市が国際都市としての機能を果たすための最初に行なければならないプロジェクトであろう。説明された現地のスタッフのこのODAの事業に対し、市民を代表して感謝するという言葉があり、終始熱弁での説明には心を打たれるものがあった。

しかしながら、これだけの改修拡幅工事及びポンプ場の設置という大事業であるからには、市民の環境に対する啓蒙にももっと取り組んでいただきたいと思った。例えば、「日本からの援助とハノイ市の川環境の政策と市民の協力によってこの川ができた。今後も市内の川の環境を市民の手でつくろう。」というような市民を啓蒙する

10月13日(月)

2日目の午後

紅河橋建設計画視察

紅河橋建設計画
(有償資金協力248.63億円)



紅河橋建設計画視察

たいへん時間が短く十分な視察ができなかったのが残念。橋を造る技術が未熟であるため、日本の大林・住友の技術で橋を造っているとのことであった。まだこの辺りは、田舎の様相をしているが、市街地がすぐそこまで迫ってきている。この橋が完成すれば、絶大なる利用が見込まれ、市内の交通量の緩和になり、15年後には1日当たり10万PCU(大型バスクラス1日当たりの通行量)という膨大な利用台数になるとのことであった。他国の下請け業者でなく、ハノイ市内にある下請け業者を指名し、市内の多くの労働者を雇用し、作業が続けられていた。順調に工事が進んでいるようであった。しかし、橋の多くは川の推量の少ない雨季を避けて造らなければならない、日本とは勝手が違うのであった。進捗状況は、現在12%であるとのことであった。

橋の長さ全長3,084mである。この橋のみならず道路の整備もあわせながらのプロジェクトである。

完成後は、ODAの援助であるとのプレートを作る義務があり、プレートを造ることとPR館も造る計画である。

10月14日(火)3日目 牛人工授精技術向上計画



ここではさまざまな品種の牛が飼われていた

ベトナム牛人工授精技術向上計画
(技術向上プロジェクト 短期専門家年間5名程度派遣)

牛人工授精技術向上計画の視察
ハノイ市から西へ自動車で2時間半でモンカダに着いた。ここでは、「人口受精師の技術向上、凍結精液の配布及び人工授精記録の管理方法の改善、ストロー方式の凍結精液製造技術の改善、種牛牛飼養管理技術の移転」を目的

としている。現在、ここで実施していることを基礎にしながら、ベトナムの高地を除く9の州で実施している。また、ベトナム政府機関は、ここをモデルにしながらベトナム全土にこの方式を広めようとしている。現在ベトナムで広く飼われている牛は、熱さには強いが、乳が多く出ないことから、ホルスタインを種牛としてF1、F2、F3を人工授精によって作り出そうとするものである。その人工授精の技術は、ストロー方式をベトナム全土に広めるものである。

ベトナムの高温に強く、よく乳が出るベトナムの乳牛品種改良としての定着をすべきであると思えた。そのためには、まだ10年以上はかかるのではないかとも思えた。また、日本の技術協力であることが、広く一般市民に知れるためには、モンカダの周辺が酪農地域として発展し、安定した収入を得ることができるよう酪農が成功することが必要であると思えた。

近くの酪農家へ訪問



牛を飼うのが7頭がやっとである。乳しぼりは、手で行っている。家族3人と1人雇っている。ハノイ市民は、乳製品はあまり好まなかったけれど、ここ数年食生活の変化で乳製品を好むようになった。また、乳製品は輸入に頼りがちであったが、自給率も上がってきている。

さらに、このプログラムによりベトナムの酪農を成功させ、自給率を上げる方向で政府は、取り組んでいる。

10月14日(火)午後 ハノイ外国語大学視察



モンカダ近くの現地の食堂で昼食。
この料理がベトナム滞在期間で一番
おいしかった。

ハノイ外国語大学

JICAからの派遣日本語教師,木村先生。見学した生徒(男子3名、女子21名)は目が輝いていた。明るく、素朴な感じがした。大学の2年生の授業であったが、日本語は中級程度であるとのこと。2年目で日本語がしゃべられることは、素晴らしい能力を持った学生であると感じた。木村先生は、ナショナル電気の職員員である。教員ではないが、しっかりと日本語で、会話中心の授業ができており、すば

らしい能力を持った人であると感じた。言葉の中には必ず日本の文化があり、言語に含まれている日本の習慣、日本人としての感覚、言葉から受け取る広い意味を伝えなければならないので、授業を行う上での提示資料の選定や学習方法等の工夫がいると感じた。木村先生の話の中で印象に残ったのは、日本では親しくなっても必ず「ありがとう」と言うが、こちらでは親しくなればなるほど「ありがとう」という言葉は使わない、例えば水くさいとのことであった。日本語教師は、こちらの習慣や文化をも吸収しながらの仕事であるため、ここの文化も吸収するという姿勢が、JICAの派遣員の重要なポイントであると感じた。

岡山県の有名なことは何ですかと。学生から私に質問があった。「桃太郎です」というと、皆知っていると行って笑ってくれた。良くご存知であった。

木村先生はJICA派遣日本語指導教員として、7代目の先生であり、日本語教師が長く続いている。これまで素晴らしい日本語指導の教員を派遣されてきたのだろう。「大きな古時計」をみんなと一緒に歌った。皆さんよく知っているのにも驚いた。指導法のうまさだけでなく、現地の人や学生達と気持ちが通じ合わなければならない。すっかり現地に溶け込む人でなければならない。現地通訳のフィーさんもこの大学出身である。おとなしく真摯に行動し、知的な人柄でもあった。日本語学科は英語に次いで入学の難しい学科であるとのことであった。去年は日本語学科が一番難しかったようである。人気の高い日本語学科である。



ハノイ外国語大学日本語教師
(青年海外協力隊日本語指導員)

最も楽しい視察であった

大学内にある日本語資料室



学生といっしょに



ハノイ外語大学からの帰りの市内の様子 バイクのラッシュにかかってしまった。



3人乗りは禁止してると言うが、4人乗りも見かけた。バイクはホンダが人気がある。ホンダの次はスズキ、スズキの次はヤマハである。



マスクをしているのは、スモッグを避けるためとファッションのためである。女性の中には、腕にも腕抜きのようなものを着けている者もいた。腕が日に焼けて黒くなるからだそうだ。日本から来た人は、半そでであったが、現地の人ほとんどは、長袖である。寒くなったとのことであった。

横断の方法は、決してあせらないこと。危ないと思ったら動かないこと。相手が避けてくれるそうだ。しかし、決して車は止まらない。横断には勇気がいる。



10月15日(水)4日目チエンチャオ橋視察
ハノイ ノンバイ空港 ダナン国際空港 ホ
イアン ホイアンからチエンチャオ橋へ(強
行軍であった)

途中であった葬式 どこかで見たよう
な感じがした



ティエン川近くの村のおばさん。ミシ
ンで服をぬっていた。ミシンは古い
が、腕は達者。カメラを向けると恥ず
かしがって布で顔を隠す。



おばさんといっしょにいた場所から。
村の風景。向こう3人は同行した日本
人。

チエン川橋梁整備計画
(草の根無償資金協力 8,888,798円)

ハノイからダナンへ

ダナンから車で1時間半 ホイアンへ到着し
た。

ホイアンホテルから2時間ティエン郡事務所
を表敬訪問した。

チエンチャオ橋全長112m。幅4.5m。オー
バーフロー型の橋である。90%完成している。
総工費約1400万円草の根無償供与889万
円。現在完成してなくてはならないが、ダム
の決壊で工事が遅れている。

郡事務所での現地の人のお話によると、この
ティエン川は村を東西に分けている。川を渡
るために毎年人が流されるという。ティエン
郡7万3千人、公務員行政職65人、全公務員
数は1900人、内教員が1400人である。日
本からの援助についてたいへん感謝している。
堤防が壊れたことが、工事の遅れの原因では
あるが、私の責任でもある。」と話されてい
た。

日本側からは、この橋を建設するに当たっ
て、何年もチェックした。この橋が長持ちす
るように、大洪水にも耐えられるように、こ
この政府と大使館と話し合い、 unnecessary
投資にならないように、しかも現地の人
の手で現地にあったものを建設するとい
うことでやってきた。

現地での視察は、激しい雨の中であつた。
バスが現地まで行けず、2回に乗り合わせ
て、ジープで現場まで行った。多くの人が
見学に来ており、見た感じでは70名ほど
の見学者であつた。日本人が視察に来ると
言うことで集まったようである。多くの
子どもたちも、大人たち、男も女もや
ってきていた。その現場で、20歳になる
男性にインタビューした。男性は素足であ
つた。雨の中の泥足であつた。

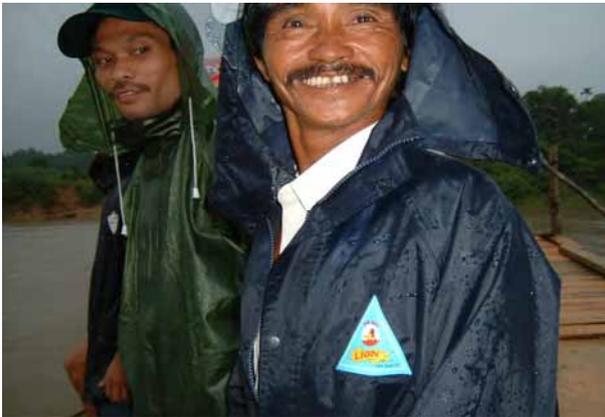


「この橋まで歩いてきた。45分かかった。今日のこの水量であれば、船では渡れない。危険である。日本の援助でこの橋ができている。橋ができれば、バナナなどの果物をバイクに載せて運ぶことができる。もうすでにバイクを買っている者もあり、この橋を渡るのを楽しみにしている。」とのことであった。

この川を船や歩いたりして渡れないときには、何が一番困っていたかという質問では、果物が腐ってしまうとのことであった。それがなくなるとい希望の橋であるとのことである。



しかし、粗末な工事であり、この橋が20年間も維持できるものなのか、疑問が残った。草の根無償は、人の命に関することでのなるべく無条件に無償援助することだ。しかし、それ自体が壊れてしまうようでは、せっかくの無償の意味がなくなる。案件に応じて無償であっても、条件付けも必要なのではないだろうか。この橋であれば、橋脚の基礎部分の深さや鉄筋の入れ方、橋の維持のための管理方法等、橋専門家のアドバイスや工事監督も必要であると思えた。



10月16日(木)5日目

ホイアンのホテル7時30分出発 (2時間半) ベトナム中南部海岸
保全植林計画視察



雨が降れば、一面水浸し。向こうに森がある。その中が村だ。村へ帰るため、腰まで浸かってしまう。中央の小さい黒い物が人である。



雨で喜んでいる水牛。ここにいる人達もこの雨で喜んでいる。途中で会うアオダイの女学生も車のタイヤではねられる泥水をかぶりながら、嫌がりながらも喜んでいるように見える。

魚をとっている人があちこちにいる。大きな魚がとれていた。村の人も魚とりに夢中である。首まで水に浸かって魚とりをしている者までいた。

大水で蛇やねずみが出てくる。蛇をつかまえ、自慢している子どももいた。帰ってからおいしいご馳走だそう。雨を嫌がっている者はいない。皆、収穫できる喜びにあふれていた。



日本の援助によるベトナムでの植林計画という大きな看板があるった。



中南部海岸保全林植林計画

(無償資金協力13.06億円)

クアンナム省とフーエン省の3670haという膨大な植生を失った地域に海岸保全林を造成しようとするものであった



クアンナム省とフーエン省の3670haという膨大な植生を失った地域に海岸保全林を造成しようとするものであった。

現地の日本人スタッフの話では、「植林の種類は、モクマオウ、ユーカリ、アカシヤの3種を植樹するものであった。日本人スタッフの話では、「現地では、防砂の目的の植林をすればよいと思ったが、現地の人々は、生産林を希望したため、砂防よりも生産林と保護林の両用できる樹木である条件のもとでの樹木選定をした。冬の干ばつ、夏の干ばつと秋冬の雨季がある。干ばつは一滴も雨が降らない激しい干ばつの時期であり、降り出せば止まらない激しい雨季もある。この日もほんの3日前までは、雨の降らない干ばつの時期であった。しかし、今日のように激しい雨が降り、ご覧のとおりの大洪水となり、各地に水溜りができている状況である。」とのことであった。



モクマオウを植えて1年目。すくすく育っている



JICAのマークがまぶしく見えた。下はユーカリの苗である。



白い砂が延々と続いていた。この2ヶ月間であの遠くの向こうまでモクマオウを植えるとのことであった。





私にだってできるよ

私も植林の体験をした。大きくなるよう祈りながら、1本だけモクマオウを植えた。10年先にもう一度この地に訪れ、大きくなった木を眺めるのが楽しみである。実際に現地の人たちが植えているところまで行った。多くの人が苗をモッコで運んでモクマオウを植えていた。一本植えるのが0.5円という。重労働ではあるが、終始にこやかであった。植え終わっているところを見れば、荒廃の土地をまっすぐに、しかも少しの狂いもないように植えている。ベトナムの人は、几帳面にして、しかも指示されたとおりにまじめに取り込んでいる。すばらしいベトナムの人達であると感じた。

現地スタッフの話では、「昨年まで1400ha植えたが、ここ2ヶ月で3400ha、660万本植えなければならない。はるか遠く、地平線の向こうまで植える。畝を作るのは人の力です。高さ30センチ幅2メートルのものを、一人一日50メートル掘り進むとのことである。一日10時間働き、日当が150円になる」とのことであった。

この植林は、人民委員会の土地へそれぞれコミュで割って、世帯で管理することであった。育てれば手当が出るとのことであった。金額は現在話中であるとのことであった。

今後の管理は、地元住民自身が管理し、自分の利益となる方法をとっているのだから、管理の行き届いたきれいな森林になるであろう。また、地元住民の力で植え、管理するのだから、この日本の無償援助はすばらしいものと感じた。

よく働く人たちです。



10月16日(木)午後 5日目
ベトナム民家文化財保存修復技術向上
計画の視察



説明も途中停電のためストップ。しょっちゅう停電がある。

ベトナム民家文化財保存修復技術向上
計画(開発パートナー事業)

ここホイアンの日本人派遣者の話は、熱意あふれる話であった。華僑の町並み保存地域とし、古い建物の修復をしている。街は東西1.4m、南北600mである。かつての朱印船貿易をしていた頃の日本人街でもある。1999年世界文化遺産に登録される街である。

日本人の現地スタッフの話では、「日本の修復技術指導で、調査研究し、できるだけ古い柱や桁を再利用する。材料は現地にある物を使い、現地の人が実際の工事をすることによって、現地のすばらしい遺産であることを、体験を持って知らせたい。こうすることによって、愛情を持って街づくりに取り組んでくれるであろう。」とのことであった。



ホイアンの港も水浸し



日本人橋も健在。
鎖国前、日本人が多く日本人が住み、
日本人町をつくっていたようである。

家々がよく修復されそこで暮らす人々は満足している感じであった。多くの観光客を呼び、一大リゾート地、観光地として栄えると思えた。街並みが美しくなり、観光人の中には現地の人も多くいた。異国情緒を味わっていたのであろう。

日本人スタッフの話は、家のつくり、街並みの移り変わり、この街の歴史、一つの建物の特徴と修復部分と家の特徴について熱く語っていただいた。一番驚いたことは、通る人が、日本人スタッフに声をかけることだ。にこやかであった。日本人を信頼し、尊敬していると思えた。日本人スタッフの人柄と地域に根ざした無償援助で、街がきれいになり活気づいたことへの感謝が現地の人の日本人スタッフへの笑顔の表れであろう。地域で最も尊敬される人物になっているのではないかと思われた。すばらしい援助である。

今後、現地の人の手で、どう街並みが改善され、文化保存をしながら観光地として栄えるかが数年又は十年後が評価のしどころと思えた。



ホイアンの
街並み



子どもの頃の炊事場を思い出させる。現在も使っているが、今後修理保存する対象である。

10月17日(金)6日目 ハイホンからハノイへ

午後4時大使館へ約2間半今回の訪問について各自語り、評価について感想を交えながら協議した。その中でティエン川草の根無償援助での無償援助のあり方について、及びハノイ外国語大学の日本語指導の方法について教員から見た指導のあり方について多くの論議があった。

ODA民間モニターとしてベトナムへ行けたことの一番の収穫は、ベトナムの人の笑顔である。日本のさまざまな多くの援助をしているが、それをベトナムの人が感謝しながら受け入れている。

ダナン・ホイアンで雨が降り続き、ホイアンの大平原が水浸しになり、そこで暮らしている人達は、当たり前のように平然と暮らし、その姿は、喜びに浸り、自然と共存している。ODA民間モニターとしての事案の視察以外にも人々の暮らしている姿が見られたことは、大きな収穫であった。

民家はまだ狭く細々と暮らしているように見えたが、豊かな国であることを痛感した。貧しくても食べることに不自由しない。稲も年3回収穫できる。野菜もたっぷりある。果物もたくさんある。戦後の日本とは違う。日本は食べることさえできなかった。だから、現在のような国になった。これまでの習慣や慣習を捨ててまでここまでやってきた日本である。捨てたものの中には、捨ててはならない、家族や親族への心情や習慣、集団で暮らすことの大切さ、地域で協力することの重要性があるのではないか。ベトナムと日本とでどちらが豊かなのであろうか、考えさせられた。他を思いやる心、食生活の健全さ、国民が持っている夢は、ベトナムの方がずっと上だ。

経済の発展は、ベトナムならではのものがあるだろう。それに、日本のODAが支援する形で、決して日本の援助が主体にならず、自助努力によってベトナムらしい国が発展されることを願うものである。

現在ベトナムに必要なものは、ガス、電気、道路、橋などのインフラ整備である。役人も丁寧な姿勢で、夢を描いている。農地で働く人々もくもくと働いている。学校へ通っている子どもたちも目がきれいで明るい。豊かな国ベトナムは、すば



今日も早朝から田んぼで働く人々。牛ものんきにえさを食いばんでいた。ハノイに帰って、ベトナムで初めて晴れた空を見た。